

日本語における『ねじれ』の感覚と文の単位性

中川正弘

0. はじめに

先に、日本語における主観の表明—ゼロ人称の文法（『広島大学留学生教育』、2006年）において、日本語では形容詞と動詞という品詞の使い分けによって、言葉を使う人間の主観、主体の意思を他の人間のものと区別しようとする傾向があること、そして、それが文法としての認知はされないまま、確立と言えるほどに安定していることを指摘し、「1人称-2人称-3人称」という文法のもっとも基本的と見なされるパースペクティブと補完し合うパースペクティブを「ゼロ人称」という概念によって論じた。

「1人称-2人称-3人称」のパースペクティブはあらゆる言語で共有しうる、客観的な文法のまさしく土台と言えるものだが、その一角に過ぎないように見えながら、まったく異なる志向を示すことがある「ゼロ人称」は、日本語において一見合理性に欠けると見えるさまざまな文法の不調和を見直すための視点として重要な意味を持つ。

日本語の文法に説明しにくいと思えるものがある場合、西洋言語の文法を暗黙のうちに基準としているためそうなることが多いのだが、見て見ぬふりをされることの多いそのようなほの暗いゾーンは、日本語がどのような言語であるかを示す重要なポイントとして、特に注目すべきであろう。

1. 英語時制の日本語翻訳

日本語には現在／過去／未来という時制がない。また、現在分詞も過去分詞もない。従って、英語文法にある現在進行形も現在完了もあるはずがない。しかし、このような時制名称を一切使わないで日本語を教える日本語教室はないのではないだろうか。

日本語の文法は英語の文法とは違うのだから、すべてを英語文法の見方に合わせるべきでないということは基本姿勢として誰もが認める。だが、「日本語には過去形がない。『た』で終わる動詞は『完了』だ」と強調する一方で、『「ーている」は現在進行形だ』と説明する日本語教師は少なくないだろう。そうでなければ、「現在進行形」という用語を使わなければいいと考え、「ーている」はアスペクトの一つである「継続」と言い換える。しかし、どちらの用語を使おうと実質的に英語文法の progressive の意味領域を扱おうとするのであれば大差なく、英語文法に絡め取られていると批判されても仕方がない。基本姿勢はただの建前になりやすい¹。

¹ 日本語教育で一般的に使われる、英文法を下敷きとした日本語文法を強く批判し、「日本語に即した、借り物でない文法」を提唱する方でさえ、「現在形／過去形」、「現在進行形」など、英文法そのままの用語を使っている。

英語時制の一項目としてであろうが、普遍的な動詞のアスペクトの一項目としてであろうが、その意味領域を基準にしていれば、日本語の文法に則しているとはいえない。このような説明は潔く英語時制の翻訳の仕方だと言ってしまったほうがいいだろう。

では、日本語に則すと、どうなるのだろうか。英語使用者向けの日本語文法辞典²では、「〜ている」は「現在進行形」と「現在完了」に相当するものとして取り上げられている。これらを「〜て（て形）」の下位項目と位置づける場合には、「動詞の単純接続」を筆頭に、「継続（現在進行形に相当する）」、「状態（現在完了）」、「未完了（現在完了の否定）」、それに「〜てください（動詞の単純接続とは扱わず）」など、「〜て」を含むさまざまな定型表現が列挙される。

「〜て」が何であるかは日本人であればだれもが分かっているはずと考えるからだろう、日本人に対して説明されることはない。それでは、外国人に対する日本語教育でどう扱っているか。やはりて形はただ動詞の形態の一つとして示されるだけだ。そして、今挙げたように「単純接続」、「現在進行形」、「現在完了」、「その他の定型表現」ぐらいの分類で、多くは使用頻度に応じて序列を付け、教科書の中に配列していく。理解の目標はごく単純に上述の英語文法を構成する概念に準拠する。日本語教科書中ではこれらの英語文法の用語を積極的に使っていないだけで、解説書、補助教材では当然のようにこれらを使う。見ようによってはかなり「欺瞞的」だ。内容を英語文法そのままにしながら、表面的には純粋な日本語文法であるかのように見せかける。これは現実的、実践的に見えるが、日本語の素顔の理解には繋がらない。

2. 翻訳されない日本語文法 - 「〜てある」「〜されている」

日本語の文法で、翻訳してみれば英語に置き換えができていないと感じられるものは少なくない。しかし、中には分析的に扱おうとすると、論理構造がちぐはぐでとても説明にならないためだろう、扱いをはしょっている、あるいは黙殺しているとしか思えないものもある。「〜てある」がその一つだ。これを説明するためにどのような翻訳が使われているかを見てみよう。

1) わたしの本やノートには全部、名前が書いてあります。

My name is written in all my books and notebooks.

でない文法」を提唱する方でさえ、「現在形／過去形」、「現在進行形」など、英文法そのままの用語を使っている。

参照：金谷武洋、日本語文法の謎を解く-「ある」日本語と「する」英語、ちくま新書、2003年。

金谷武洋、日本語に主語はいらない、講談社選書メチエ、2002年。

² 参照：Seiichi Makino, Michio Tsutsui, *A Dictionary of basic Japanese grammar* (日本語基本文法辞典), Japan Times, 1989.

2) 最近の名刺にはEメールアドレスも書いてあります。

Recent business cards usually **bear** the person' s E-mail address.

3) 部屋のドアに、「この部屋に入ってはいけません」と書いてありました。

A notice forbidding entry **was** on the door to the room.

4) 昨日先生のうちに行きました。部屋の壁にはきれいな絵が掛けてありました。

I visited my sensee' s house yesterday. A beautiful painting **was** on the wall of the room.

(西口光一、基礎日本語文法教本、アルク、pp.87-88)

ここで用いられた英語は「一てある」を説明するために使われる典型的な翻訳であり、多くの日本語教育機関で用いられる代表的な日本語教科書の英語による文法解説と変わらない。

壁に絵が掛けてあります。

There' s a picture on the wall.

(新日本語の基礎、30課)

交番に町の地図がはってあります。

There' s a town' s map on the wall at the police box.

(みんなの日本語 II、第30課)

最初の例1)の「名前が書いてある」は my name is written と、 write の受動態に訳されている。しかし、「名前が→ my name」、「ある→ is」には日本語と英語の対応を指摘できはしても、「書いて→ written*」までは難しい。受動ではない過去分詞の用法として「完了」を持ち出せなくもないが、my name is written に日本語で対応するとだれもが考える「名前が書かれている」という典型的受動文と比べれば、これと何が違うのか説明しなければならなくなるだろうし、その面倒を避けるためであろう、「書いてある」と「書かれている」を積極的に引き比べる文法解説はないようだ。そんなことをすれば、受動態/能動態と「無生物ある/生物いる」、「主格が/目的格を」という基本文法の組み合わせがこれではおかしいのではないか、どうして基本通りの組み合わせにならないのだと問われるに違いない³。

³ みんなの日本語 II、第30課の英語版文法解説では別の動詞で以下のように客観的に組み合わせの事実のみを示す。

[Note] The difference between V て-form います and V て-form あります

a) 名前が書いてある

a)-1 名前を書いている a)-2 名前を書いてある a)-3 名前が書いている

b) 名前が書かれている

b)-1 名前が書かれてある b)-2 名前を書かれている b)-3 名前を書かれてある

上の a)-1 から a)-3、b)-1 から b)-3 の組み合わせも日本人によって使われていなくはないのだが、規範を明示することが望まれる日本語教育では「誤り」と扱いたいところだ。

「主格が／目的格を」、「書いて／書かれて」、「無生物ある／生物いる」のどの組み合わせも日本人が使っているなどと言えば、「文法不在の日本語」という亡霊のようなイメージを呼び起こしかねない。

最初に見た英語訳が *my name is written* という受動態だということは、日本語教育ではこのような内容を表す場合、能動態より受動態が歓迎されることを意味していよう。ところが、教科書で扱う文法の中で難易度の高い文法概念と見なされるためか、受動態が教科書のかなり後のほうで教えられるのに対して、「てある」はかなり早い段階で扱う。それは、現代の日本語で極めて使用頻度の高いて形を既に習い、「書いて」が使えるようになっていれば、同様に真っ先に教える「主格が／目的格を」、「無生物ある／生物いる」を単に合わせるだけと考えられるからだ。

しかし、このように使われる動詞のて形はこの文構造において添え物程度としか評価されないようだ。それをよく示すのが 2) と 3) の例文だ。こちらでは動詞「書いて」の使用を表す英語は出現せず、ただ物の存在を表す *bear*、*be* だけになる。結局、て形の動詞は「名前が書いてある→名前がある」、「絵が掛けてある→絵がある」のように「てがある」の文に加えられた過剰な文要素と見なされ消されてしまう。

初級日本語教科書では、受動態はまだまだ先の、早い時期に扱うためだろう、「主格が」と「無生物ある」の間に構文の論理構成から言えば不適格な他動詞の能動形が組み込まれ

⑦窓が閉まっています。 The window is closed.

⑧窓が閉めてあります。 The window has been closed(for some purpose).

⑦ simply describes the state that the window is closed, while ⑧ implies that somebody (it could be the speaker himself) closed the window with some objective or intention in mind. Most verbs used in V て-form います are intransitive, while verbs used in V て-form あります あります are transitive.

⁴ 以下は Google による単純検索のヒット数である。これらの数字には文脈をみて厳密に意味を確認すれば除外すべきものも混じっているのだが、大まかな分布は十分示していよう。

名前が書いてある	113,000	名前が書かれている	30,600
名前を書いている	15,100	名前が書かれてある	2,040
名前を書いてある	2,300	名前を書かれている	1,900
名前が書いている	2,020	名前を書かれてある	1,800

ことをいぶかしがる学習者はまずいない。

このようなことになってしまうのは結局、「てある」、「てられている」に論理的でないという感触があるためだろう。「て」で接続される二つの動詞の一方の主語になるものももう一方の動詞に対しては目的語になるのだから、「ねじれ」があると言わざるを得ない。て形接続ということでは同じにも見える「ている」、「ておく」などとはそこが違う。

「ねじれ」というと、声をそろえて論理性の欠如を咎め、恥ずべき現象と考える。しかし、「ねじれ」が問題と思えるほど出現頻度が高いとき、それは「ねじれてもいい」、「ねじれたほうがいい」という感覚が背後にある可能性も考えた方がいいのではないだろうか。

3. 「ねじれ文」と日本語の作文教育

「てある（能動）」の構造が、これと表裏の関係にある「てられている（受動）」とともに、能動態／受動態、「主格が／目的格を」、「無生物ある／生物いる」の組み合わせにおける不整合を示していることを確認してみると、これは日本人向けの作文、文章指導ではまず正さなければならないとされる「ねじれ文」と大差がないということになる⁵。

●ぼくの夢は、野球選手になって、ホームランをいっぱい打ちます。

○ぼくの夢は、野球選手になって、ホームランをいっぱい打つことです。⁶

これは日本人の子どもの作文例とその直しだが、子ども、学生だけではなく、大人でさえこのような文のねじれを指摘され注意を受けることが多い。そして、作文教室の指導者は声をそろえて、文を短く簡明に、主語をはっきりさせろと言う。

多くの日本人が長すぎる文を書いて、文法を対応させそくなってしまったり、動詞の主語がだれか分からなくなる。これはいけないことに決まっているから、なくそうとしか考えない。しかし、そうしていると、この現象を半面でしか見ていないことにならないだろうか。

外国人日本語学習者の場合、誤用分析からも明らかなように日本語の基本的な語彙、文法をよく覚えていないだけでなく、母語の構文、意味構造を「直訳」しようとしておかしな日本語が生じることが多い。だが、日本人の場合は別に基本語彙や文法を知らないわけでもないし、「直訳」以前の思考があるわけでもない。

ここで視点をすこし変えてみよう。ねじれ文の典型例として上で取り上げた文を書いた子どもの文は「作文」という場で見れば確かにおおしく、小説家が小説の叙述、語りの部

⁵ 「作文／ねじれ文」でGoogle検索すると、インターネット上で公開されている作文授業のシラバスがかなり出てくる。例えば北海道教育大の日本人向けの作文授業のものを見ると、第一回目の授業をこの指導に当てている。

⁶ NHK「読み書きのツボ」小学5・6年国語／NHK デジタル教材 <http://www.nhk.or.jp/kokugo56/yomikaki/07.html>

分で使っていいと考えるはずのないものだ。しかし、登場人物の話す言葉としてはどうだろうか。ある状況、雰囲気の中では極めて自然で、文法違反などではなく、かえってリアルな表現にならないだろうか。特に、次のように「間」を明示するとそう感じられる。

「ぼくの夢は、・・・野球選手になって、・・・ホームランをいっぱい打ちます。」

作文の授業では、文法に間違いのない正しい一つの文を作るように指導する。あるいは、間違える可能性のない短い文を三つ正しく繋ぐよう指導することになる。だが、これはそれぞれの言葉が心に浮かぶ瞬間、その言葉に心、意識を寄り添わせることなく、言葉に対してある距離を取り、「俯瞰」するような冷静、客観的な視点をとれということになる。

そのような言葉遣いをする登場人物が、例えばドラマでどのような性格の人物と理解されるだろうか。言うまでもなく、「知的、よそよそしい、冷ややか、・・・」これは表現の一つの様式となるだろう。そう考えれば、文法の対応すべきところはきちんと対応した文が正しく望ましい、絶対的な理想とすべきものだとばかりは言えなくなる。このような言葉の受け取り方が示すのは、間違った日本語と正しい日本語というような単純な仕切りではなく、さまざまに選択される「文体」の存在だろう。

あまり使うことのないような難易語ではなく、間違いなく使えるはずの基本語彙や文法を日本人が使った瞬間に間違っていることはないと考えすることも不可能ではない。たくさん句をつなぎ合わせて長い一つの文を構築するのではなく、切れ切れの句ごとに完結しつつ繋いでいく意識のあり方は、極めて自然な一つの様式と考えてはどうだろうか。記憶違い、記憶かぶりによる言い間違いはあるとしても、長い一文を構築するのに必要な文法を使おうとして使い損ねるようなことは発話前の思考段階に基本的にないのではないだろうか。

とは言っても、文の全体から見れば論理構造の不整合を示す「ねじれ文」など断固として容認できないと言われる方はやはり多いだろう。しかし、それならどうして「一てある」、「一られている」にある「ねじれ」は容認できるのだろうか。

4. 日本語における単文忌避と長文志向

日本語で書かれた文の「ねじれ」に対するこのような批判や指導が学校だけではなく、上司によって書類チェックが行われる一般の会社まで同じと考えれば、日本人はほんとうに文章で失敗しやすいということだ。

前段で見た子どもの作文例は三つの句しかなく、全体で長いというほどではない。だが、この文で整えなければならない呼応は文の始まり（「夢は」）と最終端（「打つこと」）であり、呼応にこれほどの距離があることは日本語の文法に特有の条件と言える。

一方、日本人はこの例文より遙かに長々とした長文を好む傾向があるようで、文が長く

複雑に入り組んでいて意味が分からない、また使われた動詞の主語が分からないという批判を受ける作家も少なくない。

例えば、山崎豊子『華麗なる一族』の読者がブログで、『『・・・』について、これはだれが主語が分からない』と書いたりする。しかし、よく考えてみれば、この時、だれが主語なのか分からないのは読者だけで、作家自身が分かっているわけではないわけではない。分かっているわけではないのはストーリーが組み立てられないからである。それならその主語をちゃんと分かるように書けばよかった、作家はつい書き落とすという間違いを犯したのかということも言いにくい。このように問題ありと見える箇所すべてとは言えないが、ほとんどが作家の一貫した文体感覚によって、どの箇所でも「書くべきではない」「書かない方がいい」と判断されたものはずだ。

日本人に対する作文指導では、必ずと言っていいほど、文を短くはっきりさせるよう指導しなくてはならなくなる。ということは、言うまでもなく日本人が文を短くはっきりと完了させようとしないう傾向があるということだ。つまり、ぶつ切りの単文を連ねて文章を組み立てることに抵抗を覚えるのだ。

日本人の物の言い方に対して、何を言いたいかははっきりしないという批判は今でも耳にする機会が多いが、それはそうしたいのにそうできないのではなく、言いたいことをはっきり言うより、間接的な表現でほめかし、相手が自分で察するように持って行くほうが望ましいと考えているからという反論が可能だ。そうであれば、そこには言語習慣、社会習慣の違いしかない。そのような言葉の使い方が一般的になった社会では、言いかけた言葉、書きかけた言葉を完了しないことが多くなる。

あなた、お名前は・・・？

どうして欠席したの・・・？ ーちょっとカゼを引きまして・・・。

明日連絡をいただければ・・・と思います。

ちょっと用があるのですが・・・。

そして、言い終わらず、文を完了しないのを普通と思っていると、次々と言葉を連ね、長々とした文を作りやすくなるのではないだろうか。

言い終わる、文を完了するのを避けたい理由には何があるだろうか。まず、文末に心理的負荷の大きい敬語の選択などがある。この部分を消音すると、ここに何を選ばれるかは聞き手の判断に委ねられ、選び間違いの危険はなくなる。沈黙は敬意を表す代表的な遠慮の形式だ。次に挙げなければならないのは、日本語では構文規則から必ず文末に動詞が来るため、文末が同じ音の単調な繰り返しになってしまい、とても美的とは言えなくなる可能性があることだ。

【動詞構文】 ーします。ーします。ーします。ーします。ーします。

【名詞構文】 ーです。ーです。ーです。ーです。ーです。

同じ音を行末で繰り返すことは、多くの言語の韻文の原理となっている。繰り返しは、言語の美を構成する基本的要素ということだが、それは無秩序の中に見いだされるごく小数の秩序と感じられるからだろう。

その配合比率に絶対の法則はないようだが、同じものを2度繰り返すのが標準のようだ。3度以上繰り返すことはそれほど好まれないのではないだろうか。3度以上の繰り返しは単に回数が2から3に一つ増えるだけなのではなく、最初の繰り返しという行為自体を繰り返すわけだから、 1 、 $1+1=2$ 、 $1+1+1=3$ なのではなく、 1 、 $1\times 2=2$ 、 $1\times 2\times 2=4$ の表現強度を持つと言える。

作文の授業で「文を短くしろ」というような指導が必要になる言語は日本語ぐらいだろう。西洋言語の作文教育では、当然のことだが短文しか使えない者が複文、またそれ以上に長い文が作れるように教えることになるはずだ。

このような特有の条件に置かれた日本語では、文末が単調な繰り返しになるのを避けるためにどのような方法がとられているだろうか。

- ーします。ーします。ーします。ーします。ーします。
- ① ーして、 ーして、 ーして、 ーして、 ーします。
- ② ーして、 ーし、 ーして、 ーし、 ーします。
- ③ ーして、 ーします。そして、 ーし、 ーします。
- ④ ーして、 ーします。そして、 ーで、 ーです。

- ① 文を終わらず、「ーして」で接続する。
- ② 「ーして」が標準だが、「て」の連続で単調になるのを避けようと思えば、「して」と機能的には等価だが、より古い形式（現代日本語では方言ともなる）である「ーし」を組み合わせる。
- ③ 接続詞を混ぜることで変化を付ける。
- ④ 動詞構文を名詞構文化して組み合わせ、変化を付ける。

これらは○も含め、すべて文体の選択肢である。○は単調なので、だれも使おうとしないかという、そうでもなく、「単調→下手→ぼくとつ→目下→従順」の自然な連想を背景に、「従順」の表明、指標となりうる。くどいほど繰り返すことで恭順を表す候文（そうろうぶん）は現在ほとんど用いられることがなくなったが、「ーします」、「ーです」の単調な繰り返しは候文に通じる感覚を持っている。

5. 文の単位と日本語における時間性の表現

前段で、日本語では単文の羅列を嫌って、それらの文を次々に接続し、長々とした文を作ろうとする傾向、文体志向のあることを考えた。すると、そのような意識で作られた長い文は、外見は一文に見えても、内容としては、元になった単文の集合と同じということだ。動詞構文で文の数がぜんぜん違って見える以下の二つの文、文章は、内容的に等価になる。

○ ーします。ーします。ーします。ーします。ーします。【5文】

① ーして、ーして、ーして、ーして、ーします。【1文】

一文と認識されるなら、言うまでもなく、その文は自立できる。そして、文が自立できるということは、その前後の文と必ずしも同じものを主語、あるいは目的語としなくていいということだ。3. 翻訳されない日本語文法で考察した「ーてある」、「ーされている」の「ねじれ」の条件である2動詞の接続は、「て」を結節点とする2文の連なりと考えられなくもない。すると、「ねじれ」はこのような文の自由、自立を示すだけで、間違い、論理性の欠如とは言えなくなる。

英語の翻訳と比べることに慣れきっているため、1文対1文、動詞部は一つずつに決まっていると考えるのだが、先の翻訳例でも内容文の複数性は感じ取れなくない。

1) わたしの本やノートには全部、名前が書いてあります。

My name is written in all my books and notebooks.

この例文では英語の受動態がbe動詞isと過去分詞writtenの2語構造であるため、「書いてあります」の2語構造と対応しており、英語の受動態が時制として一つであれば、日本語のほうも一つと見えやすい。

2) 最近の名刺にはEメールアドレスも書いてあります。

Recent business cards usually bear the person's E-mail adress.

3) 部屋のドアに、「この部屋に入ってはいけません」と書いてありました。

A notice forbidding entry was on the door to the room.

しかし、2)、3)の例文では日本語の「書いて」が英語翻訳からこぼれている。そのため、「あります」に対応する英語の bear と was とは別に、“(?) wrote the person's E-mail

adress. ”, “(?) wrote a notice forbidding entry” という不完全文のあることが皮肉にも「明瞭」に暗示される。ここには存在している文と不在の文、2文の組み合わせがある。

2)- A 最近の名詞にはEメールアドレスもあります。

Recent business cards usually **bear** the person' s E-mail adress.

- B・・・はEメールアドレスを書きました。

(?) **wrote** the person' s E-mail adress.

3)- A 部屋のドアに、「この部屋に入ってはいけません」とあります。

A notice forbidding entry **was** on the door to the room.

- B・・・が部屋のドアに、「この部屋に入ってはいけません」と書きました。

(?) **wrote** a notice forbidding entry on the door to the room.

英語への翻訳で黙殺され不在となる文は主語の欠落した不完全文である。そして、この特定されない主語は、よくあるように文脈で暗示されているわけではなく、いわば搜索無用のレッテルが貼られたように受け取れる。

このような文は間違った、論理の一貫しない文などではなく、構文のダイナミズムを巧みに活用し、ひじょうに豊かな情報が込められた「リッチテキスト」と言えるだろう。

6. 動詞のて形接続と時制の等式

本論の最初で日本語には時制のないことを確認したが、日本語は与えられた条件の中で西洋言語の時制をどのように言い換え、等価と見なせる翻訳としているだろうか。

It rains.	【現在】	雨が降る。	【終止形】
It rained.	【過去】	雨が降った。	【完了】
It will rain.	【未来】	雨が降る。	【終止形】
It is raining.	【現在進行形】	雨が降っている。	【完了+いる終止形】
It has rained.	【現在完了】	雨が降った／ている。	【完了／完了+いる終止形】

それ自体では現在、過去、未来のどれにおいても使うことのできる「完了」は状況依存的に、それ自体記号で表されなくとも認識される「発話の現在時（今-ここ）」と組み合わせれば、「現在時における完了=過去」となる。

西洋言語の中でも、フランス語と違い、単純な「現在-過去-未来」の3分割ではなく、「現在進行形」、「現在完了」によって発話の現在時を特殊化する英語では、発生的にはこの発話の現在時を核に確立された「現在」が、特殊化された核との関係から言えば相対的

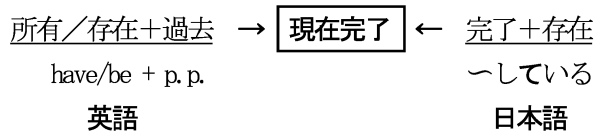
に拡大、一般化されたとと言えるだろう。” It rains.” は発話の現在時に「雨が降っている」ことを意味するのではなく、「過去」でもなく「未来」でもないものとして抽象的、概念的に措定される「現在」に「雨が降る」ことを意味する。

英語の未来時制を直訳しようとする日本語では「雨が降るだろう」と「推量」を加えることで他の時制と差別化する場合もあるが、日本語に現在と未来の区別はない。「5月15日、今朝、実家から荷物が届く」と現在では日記文体として使われる程度になったが、もともと同じ形で「過去」までカバーしたことを思えば、「現在」と「未来」が同形であることに抵抗は感じられない。

さて、英語の現在進行形は、存在を意味する be 動詞と、動詞を「変異」させて作った現在分詞を組み合わせる。フランス語では「現在時制」で表す発話の現在時を、英語はこれでは大ざっぱと考えたかのように、現在時制から抽出、分離し、それを「存在」の動詞に投影したと言えるだろう。再構築、脱構築のような趣がある。このような現在進行形を日本語では、「完了」を表すて形と「存在」の動詞いるの組み合わせで翻訳する。「て」によって接続された二つの動詞は、西洋言語流の「一つの文に一つの時制」の原則に引きずられ、時制を含む単一の動詞部と見なされやすいが、先に確認したように、それぞれが独立した二つの文と見なせたくない組み合わせだ。ここに「継続相 (progressive)」を意味するものはない。そのため強引に英語との間に等式を置く。そして、「一ている」というと、使用頻度の多さをバックボーンにもつぱら現在進行形にぴったり対応するものと考えられるようになった。

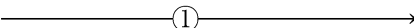

しかし、現在完了と現在進行形とが日本語では「一ている」と同じになる。そして、形成から見て、「完了+存在動詞」である「一ている」に近いのは、所有動詞/存在動詞と過去分詞を組み合わせる現在完了のほうだろう。

過去分詞が「完了」を表すには、日本語で「完了→過去」となるのと同様のずらし、転用があるからだ。



見ようによっては、日本語の「一ている」の構成のほうが「現在完了」を表しやすいとも言える。

それでは、この「現在完了」がどのように「継続 (現在進行形)」を表しうるのだろうか。これを考えるには、時制という客観的な尺度とは違う、動詞内容に対する主観的な認識のあり方を考えねばならない。

- A)  時間軸
2月10日に雨が降った。
- B)  時間軸
2月10日、1時から4時まで雨が降った。

我々は、動詞の指し示す事実に対する距離の取り方（遠近）によって、遠い場合はA)のように時間軸において1点のように感じ、近い場合はB)のように時間軸において2点間の長さと感じる。この2点とは別の時間として記しうる「始まり」と「終わり」である。

「継続」とは、言い換えれば、「始まったものがまだ終わらない」状態なのだから、それを直接表すことができなくとも、「始まった」ことを現在完了で表せば、現実には等価と見なせる。

文法解説における現在完了の用法分類には「継続」も挙げられるが、現在完了が「継続」を表すには、動詞が「始まりから終わりまで」の全体を意味するだけでなく、「始まり」という部分のみを意味することができなければならない。だが、これは、「部分で全体を表す」、あるいは、「全体で部分を表す」と定義される「提喩 (Synecdoque)⁷」を、あるいは、雨が降り始めた時に、日本人が「雨が降ったなあ」と言う事実、言語習慣のあることを想起すれば十分だろう。

7. おわりに

本稿では、本来時制ではないにもかかわらず、英語文法の投影によって、時制を表すブロックと扱われてしまう**て形**接続の動詞部が、単一の表現単位ではなく、接続、あるいは組み合わされた複数の文の価値を保持しつつ、どのように時制を日本語に言い換えているかを見た。

⁷ 修辭法、レトリックの考察はさまざまに行われている。しかし、そのほとんどが中世のヨーロッパで進められた文彩の精緻な分類の紹介、延長だ。これは、レトリックが何ものであるか考える研究の反面でしかない。レトリックという考察目標を『詩学』において最初に示したアリストテレスは分類すればすべて明らかになると考えたわけではない。分類はこのテーマを研究する「手段」であり、これを「目的」と扱えば、それこそ意味をずらすレトリックになる。一方、分類を越えて、多種多様なレトリックの「原理」、「本質」を見極めようとする研究（グループμ）があり、そこでは伝統的にレトリックを代表する比喩の地位を得てきた「隱喩 (Métaphore)」と「換喩 (Métonymie)」はどちらも2重の「提喩 (Synecdoque)」と分析され、「提喩」こそがすべてのレトリックの基本要素であるとされる。

部分で全体を表す、また全体で部分を表すこの「提喩」の構造はグループμにおいても、「転義」ではなく「文字通りの意味」と認識されることが少なくないと説明されるが、言葉の問題に限定せず、「部分でしかないものを、それを含む全体と等価に扱う」、「部分が自身で自己表現しなくても全体が代わって表す」というふうに言い換えると、さまざまな人間行動、社会習慣がこの構造を持っていることが分かる。「提喩 (Synecdoc)」がこれまで、また現在でも注目されることが少ないのは、あまりにも多く使われていることで文彩としての「効果」が感じられなくなっているからとも言えるが、このような意味、価値の置き換えをしていると気がつきにくく、置き換えなどしていないと知らぬふりをする人が多いからとも言えよう。

参照：Le Groupe μ, *Rhétorique générale*, Larousse, 1970 (グループμ、一般修辭学、大修館、1981年)

そして、西洋言語が時制で表すものを**形接続**によって「翻訳」する日本語は、文という区切り、単位が極めて恣意的で自由になりやすいこと、つまり、それぞれの話者、書き手の主観に左右されることを確認した。その意味で、本稿は**日本語における主観の表明—ゼロ人称の文法**（2006年）と同様、「日本語における主観の表明」をタイトルに冠することもできる。

しかし、何よりも興味深いのは日本語がこのような単純な形式で動詞を継いでいくことによって生まれる時間のヴィジョンだ。決して止まることのない時間を西洋言語の時制は一つの定点を基準として位置づけようとする。主動詞（主節）と同時か、それとも前か後か。それは、視点を固定することで、さまざまなモノの角度、距離を論理化する西洋古典絵画の透視図法の理念に繋がっている。

それに対し、時間を定点から「測定」するのではなく、移動しつつ次から次と語りを継いでいく日本語は「絵巻物型」と言える。日本の伝統的な絵巻物では、長い巻物の部分ごとに様々な出来事が描かれる。中心となる人物が交替することもあれば、同じ人物が時間を超えて再登場したりもする。このような複数の時間・場所の並置、展開は西洋の遠近法を基準とすればあり得るはずのない非現実的な空間認識であり、ねじれゆがんだものと見える。

だが、一点からすべてのモノを位置づける写真に当然のことながら生まれる死角、またとらえられない時間に対する欲求は西洋絵画でも近代の作家になれば明らかになる。このような構成は「非論理」、「異常」なのではなく、人間的、普遍的なヴィジョンなのだろう。

（了）